

『生活科学研究所報告』第37号「特集」について

『生活科学研究所報告』第37号は、「ジェンダーから考える生活科学」というテーマで特集を組んだ。周知のように生活科学は、以前の家政学から生まれた学問領域であり、基本的には家庭生活の衣食住を基本としたイメージが強いと思われる。しかし、近年の社会構造や生活様式の急激な変化に伴い、国内外でもさまざまなパラダイムシフトが進み、生活科学という領域自体の多様化が見られる。たとえば女性の役割を考えると、すでに国・県・市町村レベルでのさまざまな男女共同参画プログラムは始まっており、人権、社会制度・慣行、政策、家庭生活、国際協調などの分野での見直しとその成果が出始めている。今回の特集では、これまでの生活科学の領域を少し広く解釈し、ジェンダーという視点で「生活における人と環境の相互作用」を見直し、今後の方向性を模索したいと考えた。

本研究所の制度上、原稿募集は新年度の5月連休明けとなった。10月初めの締め切りまで5カ月を切る短い準備期間であったにも関わらず、論文・研究ノート・学会動向と予想以上の投稿があった。青木教授には、外国人家事労働者の受け入れに関する課題を扱った原稿を寄せていただいた。まさに時宜に適した問題提起である。永塚教授は、教育学の立場から、現代の学校教育におけるジェンダー教育と教員養成の重要性を取り上げた論考を投稿していただいた。宗形は、メキシコのファレスというアメリカに隣接する町での連続女性殺人事件と家父長制的マチズモの関係を論じた。梅本教授の論考は、これまで看過されてきた作品を通して、アリス・ベーコンから見る明治期の日本女性観を論じている。駒助教には、日本物理学会における男女共同参画の取り組みについて報告していただいたが、理系の学会における女性研究者の状況がよくわかる興味深い内容であった。

12月に開催された生活科学研究所主催の講演会では、三浦篤東京大学教授により「印象派とジェンダー」というテーマで講演していただき、今年度の研究所の特集へとつなげていただいた。投稿者並びに関係者の皆さまに感謝申し上げたい。

平成27年3月

国際関係学部生活科学研究所長

宗 形 賢 二